

時間帯・会場 1	時間帯・会場 2	氏名 (高校名)
発表題目		
概要		
1-511	3-510	佐藤友洋 (北海道浦河高等学校)
「自前で行う総合探究(地域課題解決型)」の実践について ～郡部校における組織作り・職員研修・外部連携～		
<p>本校では、10年前から総合的な学習(探究)の時間を教育課程の中心に据えるとともに外部人材による運営などを行わず、自校職員のみで地域課題解決型を中心とする総合的な探究の時間に取り組んできた。</p> <p>郡部校では、【地域課題】を探究テーマとする総合探究の授業が行われることが散見されるが、教職員の負担解消や授業の充実のためにNPO法人や学校所在地の市役所職員など学校外の人材による企画・運営に頼らざるを得ない状況もあるとお聞きする。</p> <p>本発表では、地理的条件など様々な要因により、自前での運営を余儀なくされた本校で行われてきた組織作り(指導体制)・職員研修・外部連携について、成果と今後の課題について発表させていただきます。</p>		
2-513	4-513	田中文佳 (札幌龍谷学園高等学校)
外部連携 面白い大人との出会いで、生徒の探究心に火をつける		
<p>札幌龍谷学園高校では、2年次に生徒一人ひとりの興味関心に基づく課題探究を行っています。でも、そもそも興味・関心あるものがない生徒が多数、関心があっても探究が進められない生徒も多数いました。また、教員や大人たちが求める正解を探そうとする姿勢が強かったことから、探究に‘自分自身’で取り組んでもらうための仕掛けとして、色々な取り組みの導入段階で「面白いことをしている大人」と生徒が出会う場を作るようにしました。困りごとを共有して協力してもらう中で、校外の方たちと一緒に独自のプログラム(地元企業と一緒にやる課題解決プログラム(飛龍(ヒーロー)アカデミア)、進路相談FESなど)を作ることができました。ただ、私立で、3コース設定のため生徒間の学力差も大きいことから、学年全体で同じ取り組みをすることにも課題感を感じています。</p> <p>外部連携の変遷と課題を紹介し、参加されている先生方と情報や意見を交換することで、たくさん学びたいと思っています。</p>		
1-512	3-513	阿部大輔 (秋田県立新屋高等学校)
新屋高校SSCプロジェクト(SDGs×STEAM×Career)		
<p>最新ICT教材や人材を活用したデジタル教育やアントレプレナーシップ教育を推進し、これからのデジタル社会で活躍するために必要となる「論理的思考力」や「提案力」、「問題解決能力」などの資質・能力を身につけた人材育成を目指したプログラムです。昨年度は起業体験プログラムやクラウドファンディングの挑戦、ドローンや電子顕微鏡操作体験、Pythonへの挑戦などに取り組んできました。地域社会と繋がりながら、社会課題解決や改善に向けて「継続的にリアルに学ぶ」場を創出し、本校の重点目標である「本気で挑戦し続ける新屋高校」に繋げています。</p>		
4-510	5-510	松本祐也 (岩倉高等学校)
生徒とともに学びながら育む探究活動の実践 ー本校運輸科の歴史総合の学習を例にー		
<p>本校は1897年に鉄道学校として設立され、今日まで鉄道会社へ多くの人材を輩出してきた。特に日本の近代は鉄道拡充の時代であり、国策として全国に鉄道網が張り巡らされた。2、3年で学ぶ日本史探究では、本校と関わりの深い鉄道がどのような人によって広められ、どのような理由で全国に拡張していったのか、また拡張の過程でどのような動きがあり、その後どのような道を辿ったのか、さらに気づくことは何かについて探究する授業を展開している。鉄道就職を主とする運輸科の生徒対象の授業では、詳細な鉄道関連の知識を持つ生徒から教員も教わることが多い。授業最後のリフレクションでは生徒教員相互に気づきを得て、学びながら授業が育まれている。</p>		

時間帯・会場1	時間帯・会場2	氏名(高校名)
発表題目		
概要		
1-510	2-510	唐沢 明(二松学舎大学附属柏高校(実践校))
グローバル授業での高大社連携プログラム		
<p>英語の実践コミュニケーションに力を入れている高校2年生対象のグローバルクラスのPBLの授業を半年間担当し、アクティブラーニングを展開し、プレゼンテーションや文章表現について指導した。生徒8名が自ら興味を持った課題解決のテーマに沿って取材、リサーチした内容を自ら英字新聞にまとめ、私の大学の教え子である大学4年生をゲストに招き、英文アドバイスをし、またプレゼン発表では全日空ANAの現役パイロットをゲストに招き、高大社接続授業を展開した。その後の英字新聞甲子園2023年全国大会で、準グランプリを獲得することができた。</p>		
3-512	5-512	青柳圭子(成城学園中学校高等学校)
思考法と対話による学びの深化		
<p>探究学習において考えを深めるためには、さまざまな思考法を学び、また他の人との対話を通じて客観的に捉えたり気づきを得ることが重要かつ有効である。本校における、高校3年生を対象とした探究講座で、生徒達が思考法と対話を軸に課題解決へと挑む実践を重ねた。</p> <p>システム思考やデザイン思考について学びながら、シンクペアシェア、グループディスカッションなどを取り入れ、さまざまな考え方、感じ方を理解し、自身の考え方に生かして行くプロセスは、高校生の探究学習のモデルの一つになるだろう。</p>		
2-511	3-511	片桐聡子(福井県立羽水高等学校)
生徒が問いの規模と深度を意識するための工夫～本校PBLにおける実践～		
<p>生徒にとって問いの規模と深度が適切かどうかは、探究学習が自律的なものとなるかどうかに関わり大きく影響すると思われる。本校の探究学習は、地域に関するPBL(課題解決型学習)である。過去2年間は、生徒が早期の段階で探究のプロセスと課題設定の重要性を実感することを目指し、1年次春に「ミニ探究」を実施した。また学外アドバイザーとの中間報告会を通じて、定期的に課題を見直し、解決方法を再検討する機会を設けることで、ただ単に活動を重ねて課題解決を目指すのではなく、思考の深まりや学問的な側面を充実させられるよう工夫している。本発表では、本校PBLにおける指導の工夫とその効果、今後に向けた改善点について述べる。</p>		
4-511	5-511	松岡弓弦(近江兄弟社高等学校)
卒業論文指導の勘所—論題設定における面談—		
<p>探求学習において、学びたい・深めたいという生徒の内発的動機づけをおこない、それを形に残す仕掛けとして学校が取りうる方法としては、大別して2つの方向性がある。一つは、フィールドワーク型で、学校の枠を飛び出して自然や社会・人と触れ合うことで探求の内発的動機づけをおこなうものである。そして、もう一つは、文献研究型で、図書館やインターネット上で書籍・論文などの先行研究に触れることで探求の内発的動機づけをおこなうものである。本来、この2つは別々に存在するものではなく、融合させることでより高い動機づけの効果を生み出せるように試行錯誤が必要である。</p> <p>本発表では、この2つを融合させるべく試みた3年間の探求学習デザインを紹介するとともに、探求の成果を2本の論文に書きあらわす際に必要となってくる面談指導について述べていきたい。</p>		

時間帯・会場1	時間帯・会場2	氏名（高校名）
発表題目		
概要		
1-513	5-513	辻 秀人（京都教育大学附属高等学校）
生徒アンケートから見る総探の成果		
<p>2023年度の2年生対象に、1年生総合的な探究の時間（以下、総探）の履修を終えて、2年生総探の活動に取り組む前の状態で『高校教員のための探究学習入門』p.88表10-1を基にしたアンケートを実施した。一年間の活動を終えるときに、同様のアンケートを実施した。その変容を見ることにより、私たちの実施した2年生総探の取組の成果を分析し、生徒がどのような力を獲得できたのかを考察する。分析方法はテキストマイニングを用いた。また、2022年度は総探終了後（ポスト）のみ、今年度は総探開始前（プレ）のみのアンケートとなるが総探の進め方が若干異なるため、年度による比較を行い、その差異を見る。</p>		
1-514	5-514	池田 径（大阪府教育センター附属高等学校）
「探究ナビ」から「探究する学校」へ		
<p>本校は公立の進路多様校であるが、2011年の創立以来、教育センターの附属校として「探究ナビ」の授業を実践してきた。探究ナビⅠ（1年次）は「人とつながる」をテーマに創作劇、探究ナビⅡ（2年次）は「社会とつながる」をテーマにクエストエデュケーション、そして探究ナビⅢ（3年次）は「将来につなげる」をテーマにキャリア探究に取り組んでいるが、近年では探究の実践が学校全体に波及し、図書館が探究図書館へ、生徒手帳が探究型手帳へ、教員研修が探究型研修へと発展した。そして現在は生徒と教員がともに探究する探究カフェの実現に向けて取り組んでいる。探究の実践が「探究する学校」を実現する可能性について、本校の事例を提供し、ともに考える材料としたい。</p>		
2-514	3-514	山崎勇氣（清教学園中・高等学校）
「いいこと思いついた！」が生まれる教室の作り方：興味関心×学校図書館で生徒の探究が加速する		
<p>中高生が興味関心からテーマを設定し卒業論文を書く、清教学園の探究学習。最大の特徴は「なんでも学べる学校図書館」が学校内にあること。15年以上続く卒業論文の取り組みを通じて、中高生の興味関心に応じた蔵書を収集してきました。</p> <p>生徒はいつでも専門性高い司書のレファレンスを受け、豊富な参考文献で学ぶことができます。また指導教員は授業内外を通じて、資料支援・教材開発支援といった司書のサポートを受けられます。学習者と授業者のそれぞれが、「図書館」という場によって専門知と出会い、新たなアイデアを発想し、「いいこと思いついた！」瞬間を得る。そんな、清教学園の実践を紹介します。</p>		
1-515	2-515	若杉 誠（神戸大学附属中等教育学校）
探究実践の反復により経験的・系統的に育成する探究技能		
<p>今回報告するのは、個人単位での卒業論文の執筆を教育課程の核と位置づけている中高一貫教育校での実践である。実践校では、高等学校2年生・3年生をかけて、卒業論文として1人1つのテーマを探究し、十分な質・量の卒業論文を提出することを全生徒に求めている。このための指導として、プレ卒業研究という位置づけで、重点を置く探究の過程を変えながら中学校3年生・高等学校1年生で指導を行うとともに、中学校1年生・2年生では身近なテーマを題材にした探究経験を通して探究の基礎技能を育成している。当日は、学年ごとの重点の置き方やまた探究指導のための縦割りゼミナールの経営について報告する。なお、3年制の高等学校であっても、本実践の骨子を圧縮して実施することは可能と考えている。</p>		

時間帯・会場 1	時間帯・会場 2	氏名 (高校名)
発表題目		
概要		
2-512	4-512	大村寛之 (和歌山信愛中学校高等学校)
「探究的な学び」と「個別最適化した学び」で全日制普通科の新たな扉を開くことができるのか。		
<p>2020年度の調査によると通信制課程に通う高校生は20万人を超えた。当初は学ぶ意欲のある有職者を対象としていたが、近年では全日制課程の中退者の受け入れという側面が加味され在籍者数は増加している。本学でも大学進学を目指す学習に対応できなくなり、学びへのモチベーションや自己肯定感が低下し、不登校や中退という結末を招いてしまう生徒の姿が見られていた。全日制普通科に在籍することを希望しながらもそれが叶わない生徒を減らしたいと設置されたのが、個人の興味関心に寄り添う「探究的な学び」と「個別最適化した学び」を通して自己肯定感と学びへのモチベーションの回復を目指すiコースである。これまで一定の成果を残してきたが、本学の経営状況の悪化により現高1となる2期生を最後にiコースは編成されないことになった。しかし、これまでのiコースの取り組みを多くの高校関係者に知ってもらうことで、この学びの芽を広げたいと考える。</p>		
3-516	4-516	大前吉史 (清心中学校・清心女子高等学校)
地方私立高校でのチャレンジ ～SSH対象者以外の探究活動をいかに充実させるか～		
<p>本校はスーパーサイエンスハイスクール(4期目)に指定され、生命科学コースの生徒を中心とした各学年約30名の生徒は恵まれた環境で探究活動を行い、学会やコンテストで多くの受賞者を輩出している。中にはアメリカで研究成果を発表するなど、大きな成果をあげている。しかし、その他の生徒は「総合的な探究の時間」の目標を達成するまでには至っていない状況があった。そこで、今年度から実施する高校2年生の「発展探究」(2単位)において、これまでの授業を大きく改善し、新たな取り組みを行うこととした。指導体制の構築、カリキュラムの開発、地域連携、高大連携など、昨年度からの取り組みや今年度に取り組む内容について詳しく紹介する。</p>		
4-515	5-515	渡邊智子 (愛媛県立松山南高等学校)
大規模校・普通科・週1時間でできる課題研究		
<p>愛媛県立松山南高校はスーパーサイエンスハイスクールに指定されて23年になる。本校のSSHは理数科(1クラス)のみの事業として始まったが、第IV期(16年目)から普通科(8クラス)を含む全校体制で実施されることになった。普通科320人を対象に週1時間で行う課題研究は指導のノウハウがなかった。またSSH申請の際には目新しさが求められたため、V・VI期とそれぞれ新しい目標が設定され、新しいカリキュラムを作る必要があった。IV期「チャレンジリサーチ」・V期「データサイエンス」・VI期「STEAM探究」と題して行ってきた普通科課題研究のカリキュラムと指導体制の9年間の工夫と改善を紹介する。</p>		
1-516	2-516	森永香織 (福岡女学院中学校・高等学校)
ゆるやかにしぼり込んでいく課題設定 ～「大切なひとりプロジェクト」実践報告～		
<p>福岡女学院高校では、高2で1年間の探究活動「大切なひとりプロジェクト」を実施しています。毎時間、予定していた計画通りにはなかなか進みませんが、生徒の様子や状況に応じて柔軟な変更を行いながら、学年の教員全体で取り組んでいます。決して完成形ではないのですが、生徒の興味・関心を大切に個人での「マイテーマ」設定から、活動スタイルの選択、個人・グループでの「リサーチクエスト」「仮説」の設定、情報収集に至るまでの流れや、校内での連携体制などについてご紹介し、先生方とさまざまな情報共有や意見交換ができれば、と考えています。</p>		

◎時間帯・会場 (●-△△△) につきまして

全体で5回のセッション(各30分)を行い、一人2回発表します。時間帯はセッション1:11:55～、セッション2:13:20～、セッション3:14:00～、セッション4:14:40～、セッション5:15:20～で予定しています。●はセッション番号を表します。

会場(△△△)は、教室番号510～516の7教室に分かれて行います。